

# 「気になる子ども」の保育困難と言語的コミュニケーション

佐々木由美子<sup>1</sup>、采澤 陽子<sup>2</sup>、黒田由美子<sup>3</sup>

1 帝京短期大学（非）・太田情報商科専門学校  
2 足利短期大学、3 太田情報商科専門学校

キーワード：保育者・気になる子ども・保育困難・コミュニケーション・言語

## Child Care Difficulty of Worrisome Children “Kininarukodomo” and Their Oral Communication

Yumiko Sasaki<sup>1</sup>, Yoko Unezawa<sup>2</sup>, Yumiko Kuroda<sup>3</sup>

1 Teikyo Junior College・Ota Information and Business College  
2 Ashikaga Junior College 3 Ota Information and Business College

**Abstract** : Recently, there is increasing interest in understanding and supporting worrisome children, so called as “Kininarukodomo” among staff and teachers in the child care field. Act on Support for Persons with Developmental Disabilities went into effect in 2005, and thereafter a medical treatment, welfare, and educational supports to the developmental disorder have been promoted. However, there are a lot of children who need special supports even though they are not diagnosed as the developmental disorder. Hence in the present study, the definition of the “Kininarukodomo” includes the children whom people in child care field feel hard to bring up as well as the children diagnosed as developmental disorder. We surveyed on the “Kininarukodomo” to clarify what is really difficult matters that child care staffs were facing in their daily work. The result of this study indicated that the most difficult problem for them was oral communications with “Kininarukodomo”. When considering the results from the survey that oral communication is the most concern and a possibility that the day care center which we surveyed had some foreign children, it seemed worthwhile paying attention to the presence of foreign children. Based on the current result, the problem concerning the multi-cultural symbiosis child care is now under investigation.

**Key words** : Child Care Staffs, Worrisome Children, Child Care Difficulty, Oral Communication.

### 緒言

近年保育現場では「気になる子ども」の存在とその理解や支援のあり方について関心が高まっている。文部科学省が「通常の学級に在籍する特別な教育支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」と題して2002年に行った調査の結果によれば、通常学級で学習面や行動面に著しい困難を示す児童生徒の割合は全児童数に対して6.3%に上る。これは保育現場でも同程度の割合で困難を示す子どもが存在することを示唆する。さらに、厚生労働省が2006年に行った研究においては、1000名を越える5歳児を小児科医が診察するという確度をもって軽度発達障害児の発生頻度は8.2～9.3%であると推定されたと報告している。

2005年に発達障害者の自立及び社会参加に資するようその生活全般にわたる支援を図り、もってその福

祉の増進に寄与することを目的とする「発達障害者支援法」が施行された。その後自閉症やアスペルガー症候群、その他の広汎性発達障害、注意欠陥多動性障害（ADHD）、学習障害（LD）などの発達障害に対して、心理機能の適正な発達を支援し、円滑な社会生活を行うための医療・福祉・教育的支援は法的には促進の方向に進んでいる。しかし、郷間ら（2008）も述べているように、保育および教育現場では、発達障害と診断されないものの特別な支援を要する児童も多数存在し、その対応に苦慮しているというのが現状である。

保育現場では近年、保育に困難を有する児童の存在が目立って「気になる子ども」として位置づけられている。国立国会図書館オンラインデータベースを用い、「気になる子ども」をキーワードとして検索した結果151件がヒットした。そのうち、59件が保育に

表1 気になる子どもの定義

| 研究者 | 発表年  | 定義の概要   |
|-----|------|---|
| 金田ら | 2000 | 保育者の中に確立しているその年齢にふさわしい子どもの像から逸脱している子ども                              |
| 馬場ら | 2001 | 保育者が日々の保育において、何らかの関わりの工夫や保育の見直しが必要と感じる園児                            |
| 矢野ら | 2002 | 発達の遅れが憂慮される子どもや集中困難な様子や落ちつきのなさを示す子どもたち                              |
| 本郷ら | 2005 | 調査時点では何らかの障害があるとは認定されていないが、保育者にとって保育が難しいと考えられている子ども                 |
| 日高ら | 2008 | 発達障害児を含めた、保育現場で保育者が気がかりになる子ども                                       |
| 藤井ら | 2010 | 発達障害と共通した特徴が認められるが、はっきりとした診断がついておらず、保育者がその子どもに対してどのように関わってよいか戸惑う子ども |

関するものであった。「気になる子ども」の定義に関する論考においては、研究者によって違いがあり、その定義を整理すると表1のようになる。特に、障害と診断されている児童を「気になる子ども」の範疇に含めるか否かについては議論の多いところである。

障害認定に関しては、保護者の障害に関する認識の程度差や、子ども自身の発達の個人差の存在により明確な線引きは不可能であり、一貫性がない。根来・山下(2004)は、発達障害はしばしば「見えない障害」とよばれ、早期対応の重要な機会を逃してしまう場合が少なくなく、保護者は「障害の気づき」と「障害の否定」のジレンマ状態に陥っていると述べている。さらに、保育者はジレンマに陥っている保護者、障害に気づきのない保護者に対しても困難を感じているとも述べている。さらに上述の厚生労働省(2006)の研究において、5歳児検診で発達障害と診断された児童の半数以上は3歳児健診で問題なしと判定されており、現行の健診体制では十分に対応できないことが判明したと報告されている。従って筆者らは「気になる子ども」を障害の有無を基準にするべきでないとする。

そこで、本研究では「気になる子ども」を障害と診断されている児童も含め、「保育者が保育する上で社会適応が難しく、保育に困難を有すると思われる児童」と定義した。そして、いわゆる「気になる子ども」に対して、保育士が直面する保育困難を整理すると同時に困難の打開に繋がる新たな方策を模索する目的で、質問紙法による実態調査を行った。

## 調査方法と対象

### 1. 調査対象

群馬県東毛地域周辺にある保育園の年少、年中、年

長児クラスを対象とした。群馬県東毛地区周辺は筆者の勤務する保育士養成校が所在する場所であり、学生の実習先および就職先として関わりの深い地域である。従ってインクルージョン保育に関する見識をもった保育士を育成し地域に貢献するために、本研究は教育上有用と考えられることから、当地域を研究対象として選択した。

### 2. 調査方法

調査方法は郵送法とした。すなわち、研究の趣旨を明記した依頼文書と質問紙を、26の保育園に配布し、

表2 気になる子どもの人数

| 保育園 | 園児数   | 障害と診断されている児童数(X) | 保育に困難を有する児童数(Y) | X+Y |
|-----|-------|------------------|-----------------|-----|
| A   | 81    | 0                | 1               | 1   |
| B   | 72    | 1                | 4               | 5   |
| C   | 85    | 0                | 3               | 3   |
| D   | 44    | 3                | 2               | 5   |
| E   | 72    | 1                | 8               | 9   |
| F   | 49    | 1                | 4               | 5   |
| G   | 95    | 1                | 0               | 1   |
| H   | 71    | 1                | 2               | 3   |
| I   | 76    | 0                | 6               | 6   |
| J   | 70    | 0                | 6               | 6   |
| K   | 39    | 2                | 4               | 6   |
| L   | 56    | 0                | 5               | 5   |
| M   | 16    | 1                | 1               | 2   |
| N   | 95    | 2                | 1               | 3   |
| O   | 50    | 4                | 3               | 7   |
| P   | 81    | 3                | 5               | 8   |
| Q   | 117   | 0                | 10              | 10  |
| R   | 59    | 1                | 2               | 3   |
| 合計  | 1,228 | 21               | 67              | 88  |

表3 問題行動の平均値、標準偏差

| 問題行動                                    | 平均値  | 標準偏差 |
|---|------|------|
| 1 他児に対し、突然叩いたり突き飛ばしたりする。                | 2.44 | 1.38 |
| 2 他児の制作物を壊したり遊びを妨害したりする。                | 1.97 | 1.38 |
| 3 順番を守らないで横から入り込もうとする。                  | 2.92 | 1.51 |
| 4 「バカヤロー」などの暴言を吐く。                      | 1.78 | 1.19 |
| 5 泣いている子を見て笑ったり楽しんだりする様子がある。            | 1.57 | 0.96 |
| 6 いけないとわかっているのにやってしまう。                  | 2.74 | 1.42 |
| 7 じっとしてられない。                            | 3.04 | 1.52 |
| 8 飽きっぽい。                                | 2.89 | 1.30 |
| 9 一度気分が崩れると切り替えができない。                   | 2.68 | 1.39 |
| 10 思い通りにならないとパニックになり不適切な行動をとる。          | 2.64 | 1.46 |
| 11 日によって調子の良い時と悪い時の差が大きい。               | 2.42 | 1.45 |
| 12 注意されると保育者を叩いたり蹴ったりする。                | 1.71 | 1.19 |
| 13 手先の不器用さが見られる。                        | 2.94 | 1.42 |
| 14 体の動きがぎこちない。                          | 2.60 | 1.39 |
| 15 みんなと一緒に活動に参加できない。                    | 2.72 | 1.40 |
| 16 自分の好きな活動のみかかわる。                      | 2.32 | 1.27 |
| 17 絵本を見る場面で座って聞けない。                     | 2.25 | 1.36 |
| 18 集団活動中に部屋から出て行ってしまう。                  | 1.88 | 1.34 |
| 19 呼ばれても振り向かない。                         | 1.69 | 1.07 |
| 20 視線を合わせない。                            | 1.89 | 1.08 |
| 21 興味のあるものの方に走って行き迷子になる。                | 1.90 | 1.13 |
| 22 興味のないことはしない。                         | 2.51 | 1.26 |
| 23 急な予定の変更に混乱する。                        | 1.99 | 1.28 |
| 24 新しい場面ではなかなか慣れない。                     | 2.31 | 1.29 |
| 25 手足をそわそわ動かしたりきよろきよろしたりする。             | 2.42 | 1.46 |
| 26 相手の表情・気持ちを理解できない。                    | 2.46 | 1.24 |
| 27 他児が怒っていることをうまく理解できない。                | 2.39 | 1.36 |
| 28 言葉の発達の遅れがある。                         | 2.63 | 1.71 |
| 29 独特な言葉の使い方をする。(オウム返し、疑問文で要求するなど)      | 2.31 | 1.50 |
| 30 言葉の理解に乏しい。                           | 2.63 | 1.43 |
| 31 保育者の話を遮って自分の考えを述べようとする。              | 2.15 | 1.27 |
| 32 保育者が注意を向けていないときにしゃべりかける。             | 2.14 | 1.25 |
| 33 自分の興味や関心のある話題を一方向的に話したがる。            | 2.44 | 1.37 |
| 34 話している途中で別の話題に移ってしまう。                 | 2.03 | 1.29 |
| 35 他に気になることがあると保育者の話を最後まで聞けない。          | 3.10 | 1.29 |
| 36 視覚的に提示しないと理解が難しい。                    | 2.11 | 1.37 |
| 37 自己刺激行動が見られる。(くるくる回る、手をひらひらさせるなど)     | 1.67 | 1.14 |
| 38 特定のものへのこだわりがある。(数字、車、電車、時刻表、ロゴマークなど) | 1.97 | 1.48 |
| 39 順番や道順、物の位置、就寝時や外出時などの一定の儀式的行為がある。    | 1.56 | 1.07 |
| 平均                                      | 2.30 | 1.33 |

園長を通してクラス担任に配布してもらい、回答の上郵送にて回収した。対象児童は18の保育園、50名の保育者から得られた1228名のうち、保育者が保育に困難を有すると感じた児童88名とした。また、個々の児童が特定できないよう、A児、B児、C児のような記載方法を採用した。

### 3. 調査期間

2010年7月～8月

### 4. 調査項目

1) 保育者が担当するクラスにおける保育困難を有する児童の人数調査

2) 質問紙による問題行動の有無と程度の調査

どの程度の保育困難を感じるかを以下の5つの選択肢の中から一番近いものを選択してもらう。

1：あてはまらない

2：どちらともいえない

- 3：ややあてはまる
- 4：かなりあてはまる
- 5：非常にあてはまる

- 3) 自由記述による、保護者に関する問題の調査
- 4) 各質問間における相関による分類と分析

## 結果

回答は26園中18園から得られ、回収率は69.2%であった。回答に欠損や偏りがあった場合を除き、有効回答50名の保育者から得られたアンケート結果を分析対象とした。本調査では表2に示したとおり、全児童数1228名に対し、発達障害と診断されている児童合計21名(1.70%)、発達障害と診断されていないものの保育に困難を有する児童合計67名(5.50%)、両者合計「気になる子ども」は88名(7.20%)という結果であった。

得られた88名の「気になる子ども」について、どんな問題行動(2010年4月17日に、白百合女子大学・乳幼児発達研究会で発表された実態調査における気になる行動を参考に筆者らが検討の上設定)がある

か質問紙にて調査した結果は表3で示したとおり、39の質問(5段階評価)の平均値が2.30であり、標準偏差は1.33であった。

個々の質問のうち、保育者が一番困難と感じるのは「35 他に気になることがあると保育者の話を最後まで聞かない」、であった。逆に多くの保育者があまり困難と感じていないのは「39 順番や道順、物の位置、就寝時や外出時などの一定の儀式的行為がある」であった。

各質問の尺度項目と尺度項目の相関係数を求めたところ、質問1～質問8までは $r=0.142\sim0.680$ ( $p<0.01$ ) (表4)、質問9～質問12までは $r=0.147\sim0.539$ ( $p<0.01$ ) (表5)、質問13・14は $r=0.586$ ( $p<0.01$ ) (表6)、質問15～質問18までは $r=0.354\sim0.569$ ( $p<0.01$ ) (表7)、質問19～質問25までは $r=0.042\sim0.732$ ( $p<0.01$ ) (表8)、質問26～質問30までは $r=0.101\sim0.749$ ( $p<0.01$ ) (表9)、質問31～質問35までは $r=0.240\sim0.592$ ( $p<0.01$ ) (表10)、質問36～質問39までは $r=0.386\sim0.369$ ( $p<0.01$ ) (表11)の相関がそれぞれみられ

表4 衝動攻撃性項目の相関

| 問題No | 1        | 2        | 3        | 4         | 5        | 6        | 7        |
|------|----------|----------|----------|-----------|----------|----------|----------|
| 1    |          |          |          |           |          |          |          |
| 2    | 0.654 ** |          |          |           |          |          |          |
| 3    | 0.545 ** | 0.424 ** |          |           |          |          |          |
| 4    | 0.489 ** | 0.518 ** | 0.264 ** |           |          |          |          |
| 5    | 0.368 ** | 0.562 ** | 0.334 ** | 0.383 * * |          |          |          |
| 6    | 0.454 ** | 0.525 ** | 0.501 ** | 0.505 * * | 0.368 ** |          |          |
| 7    | 0.466 ** | 0.468 ** | 0.492 ** | 0.277 * * | 0.282 ** | 0.544 ** |          |
| 8    | 0.209 ** | 0.210 ** | 0.320 ** | 0.285 * * | 0.142 ** | 0.389 ** | 0.680 ** |

\*\* ;  $p<0.01$

表5 情動制御項目の相関

| 問題No | 9        | 10       | 11       |
|------|----------|----------|----------|
| 9    |          |          |          |
| 10   | 0.456 ** |          |          |
| 11   | 0.360 ** | 0.539 ** |          |
| 12   | 0.147 ** | 0.360 ** | 0.462 ** |

\*\* ;  $p<0.01$

表6 不器用項目の相関

| 問題No | 13       |
|------|----------|
| 13   |          |
| 14   | 0.586 ** |

\*\* ;  $p<0.01$

表7 社会性項目の相関表

| 問題No | 15       | 16       | 17       |
|------|----------|----------|----------|
| 15   |          |          |          |
| 16   | 0.569 ** |          |          |
| 17   | 0.452 ** | 0.354 ** |          |
| 18   | 0.522 ** | 0.472 ** | 0.519 ** |

\*\* ;  $p<0.01$

表8 コミュニケーション項目の相関

| 問題No | 26    |    | 27    |    | 28    |    | 29   |     |
|------|-------|----|-------|----|-------|----|------|-----|
| 26   |       |    |       |    |       |    |      |     |
| 27   | 0.568 | ** |       |    |       |    |      |     |
| 28   | 0.042 | ** | 0.216 | ** |       |    |      |     |
| 29   | 0.234 | ** | 0.370 | ** | 0.569 | ** |      |     |
| 30   | 0.431 | ** | 0.417 | ** | 0.473 | ** | 0.73 | 2** |

\*\* ; p<0.01

表9 注意集中項目の相関

| 問題No | 19    |    | 20    |    | 25    |    | 31    |    | 32    |    | 33    |    | 34    |
|------|-------|----|-------|----|-------|----|-------|----|-------|----|-------|----|-------|
| 19   |       |    |       |    |       |    |       |    |       |    |       |    |       |
| 20   | 0.396 | ** |       |    |       |    |       |    |       |    |       |    |       |
| 25   | 0.101 | ** | 0.297 | ** |       |    |       |    |       |    |       |    |       |
| 31   | 0.252 | ** | 0.247 | ** | 0.366 | ** |       |    |       |    |       |    |       |
| 32   | 0.233 | ** | 0.335 | ** | 0.509 | ** | 0.651 | ** |       |    |       |    |       |
| 33   | 0.228 | ** | 0.309 | ** | 0.286 | ** | 0.661 | ** | 0.662 | ** |       |    |       |
| 34   | 0.272 | ** | 0.386 | ** | 0.226 | ** | 0.418 | ** | 0.567 | ** | 0.749 | ** |       |
| 35   | 0.205 | ** | 0.361 | ** | 0.501 | ** | 0.522 | ** | 0.542 | ** | 0.365 | ** | 0.337 |

\*\* ; p<0.01

表10 適応性項目の相関

| 問題No | 21    |    | 22    |    | 23    |
|------|-------|----|-------|----|-------|
| 21   |       |    |       |    |       |
| 22   | 0.294 | ** |       |    |       |
| 23   | 0.340 | ** | 0.240 | ** |       |
| 24   | 0.244 | ** | 0.311 | ** | 0.592 |

\*\* ; p<0.01

表11 固執項目の相関

| 問題No | 36    |    | 37    |    | 38    |
|------|-------|----|-------|----|-------|
| 36   |       |    |       |    |       |
| 37   | 0.386 | ** |       |    |       |
| 38   | 0.564 | ** | 0.587 | ** |       |
| 39   | 0.408 | ** | 0.500 | ** | 0.639 |

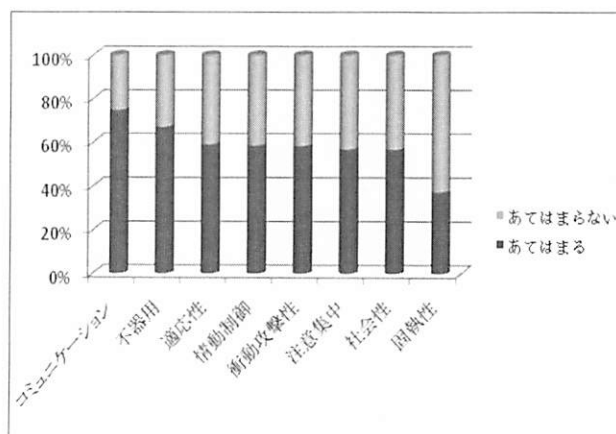
\*\* ; p<0.01

た。

このことから、相関のある質問間には一定の概念があることを見だし、以下のように項目を定義した。質問1～質問8は衝動攻撃性、質問9～質問12は情動制御、質問13・14は不器用、質問15～質問18は社会性、質問26～質問30はコミュニケーション、質問19・20・25・31～質問35は注意集中、質問21～質問24は適応性、質問36～質問39は固執と定義した。

さらに、得られた8項目間の分析を行った結果、図1に示すように保育者が一番保育に困難を有するという項目はコミュニケーションの問題（あてはまる74.7%・あてはまらない25.3%）であることが分かった。また、不器用さ（あてはまる67.1%・あてはまらない32.9%）にも困難を感じる度合いが強く、固執性（あてはまる37.4%・あてはまらな

図1 保育者が保育困難と感じる割合



い62.6%)には困難を感じないという保育者の割合が高かった。衝動攻撃性は（あてはまる58.4%・あてはまらない41.6%）、情動制御は（あてはまる

58.6%・あてはまらない41.4%)、社会性は(あてはまる56.8%・あてはまらない43.2%)、不注意は(あてはまる57.0%・あてはまらない43.0%)、適応性は(あてはまる59.1%・あてはまらない40.9%)であった。

## 考 察

2006年6月15日に「学校教育法等の一部を改正する法律案」が可決・成立し、2007年度から特別支援教育が始まった。それとともなって、学校現場だけでなく保育の現場でも個に応じた保育を目指し、保育者の発達障害児に対する理解も深まっている。本研究においても問題行動の5段階評価の平均が2.30、標準偏差が1.33であったことから、気になる子どもの存在はあるにしても、非常に困難だと感じる保育者の割合は低かった。これは、発達障害の行動特性や対応方法の認知が進み、理解を持って「気になる子ども」を受容できる保育者が多くなってきているからだと考えられる。1994年の特別なニーズ教育における原則、政策、実践をうたったサマランカ声明における基本理念であるインクルージョン保育の流れの中で、現在保育所には障害を持った児童を含め様々なタイプの児童が通っている。本保ら(2000)は、インクルージョン保育は障害を持った児童にとっても健常児にとっても発達や行動により影響となると報告している。しかし保育者にとっては、依然として様々なタイプの児童が「気になる子ども」として捉えられ、その対応に苦慮しながら保育していることは、多くの関連文献が指摘し本研究でも明らかであり、否めない事実である。

保育所という集団の保育場面では、集団行動における問題の占める比重が大きいと思われる。しかし、本研究では、固執によって集団行動が乱れても困難を感じる保育者の割合は少なかった。このことは、固執が自閉症児の特徴的行動であり、最近の保育現場の知識および意識の向上により、受容できる項目となったためと考えられる。

また、コミュニケーションに次いで保育者が保育に困難を有する割合が高かったのは「手先の不器用さがみられる」、「体の動きがぎこちない」の不器用項目であった。特に「手先の不器用さがみられる」の質問に「非常にあてはまる」と回答した保育者の数が一番多かった。井口(2000)は不器用を「身体運動・操作力に関するもの」として取り上げたが、集団生活行動、言葉、情緒的不安に比べて割合の低い項目であるとしていた。他の先行研究においても、不器用に言及しているものは少なく、さらなる調査研究が必要であろう。

本研究において、保育者が一番困難な問題として取

り上げた割合が高かったのがコミュニケーションの項目であった。コミュニケーションと定義した項目の4つの質問のうち3つは言語の問題(発信・応答)を取り上げている。また、個別の質問項目で一番保育者が困難と感じている項目も「保育者の話を最後まで聞かない」といった言語における応答の問題である。個々とのコミュニケーションで主となるのが言語を媒介としたやり取りであり、その機能は単に情報の伝達だけでなく、情動的な共感や相手の行動の制御をも含んでいる。コミュニケーションの構築には、そのための適切な発信および適切な受信と理解ができていないことが必要であると筆者らは考える。すなわち、保育現場においては、言葉の発達と理解がコミュニケーションを成り立たせる大きな要因であるといえる。

池田ら(2007)は保育者の「気になる子ども」を保育する上での問題や悩みから「気になる子ども」の特徴をあげると、ことば・コミュニケーションに関する問題が多く、続いて行動に関するもの、社会性・対人関係に関するものであったと報告している。

本研究における自由記述項目の中に、「外国人の保護者とのコミュニケーション障害が園児の問題行動とかかわりを持つのではないか」という意見があった。

また、林(2001)の調査では、「言葉が通じなくて乱暴になっている外国人児童」の存在にも触れている。このことから、「気になる子ども」のコミュニケーション、特に言語に関する問題を取り上げるのであれば、外国人児童の存在にも目を向けなければならない。さらに、今回調査を行った群馬県東毛地区周辺は、在日外国人人数が多い地区も含まれており、「気になる子ども」の中には外国人児童が存在していることも考えられる。しかし、本研究の質問紙によるアンケート調査では児童の国籍に言及しなかったため、「気になる子ども」と外国人児童との関連性については調査できておらず、多文化共生における保育の問題は現在研究中である。

## 謝 辞

本調査にあたり、ご協力いただいた保育園の園長先生をはじめ諸先生方に心より感謝申し上げます。

また、本稿をまとめるにあたりご指導くださいました立正大学大学院社会福祉学研究所の溝口元教授に深謝いたします。

## 引用文献

- [1] 井口均 2000 保育者が問題にする「気になる子」についての傾向分析 長崎大学教育学部紀要-教育科学 59 pp1~16
- [2] 本保恭子;南原リツ子 2000 わが国の障害

- 児・者に対する意識調査の動向—主に統合教育・共生の観点から— ノートルダム清心女子大学紀要 生活経営学・児童学・食品栄養学編 24 pp1～11
- [2] 金田利子；今泉依子 2000 集団保育における個別指導（1）—保育園において「気になる」といわれている子どもに着眼して—日本発達心理学会第11回発表論文集 p119
- [3] 林恵 2001 群馬県大泉町における外国人の就学前保育の現状について 平成11～13年度科学研究費助成金研究成果報告書 pp81～94
- [2] 馬場禮子；青木紀久代；矢野由佳子 2001 保育における心理臨床研究のあり方—保育現場に生じる問題と対処の行方—安田生命社会事業団研究助成論文集 37号 pp223～230
- [4] 文部科学省 2002 「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」研究結果
- [2] 矢野由佳子；本保恭代；青木紀久代；馬場禮子 2002 保育における「気になる子どもたち」日本心理臨床学会第21回大会発表論文集 p353
- [5] 本郷一夫；澤江幸則；鈴木智子；小泉嘉子；飯島紀子 2003 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査研究 発達障害研究 25 pp50～61
- [6] 根来あゆみ；山下光 2004 軽度発達障害児の主観的育てにくさ感 母親への質問紙調査による検討 発達 97 pp13～18
- [7] 池田友美；郷間英世；川崎友絵；山崎千裕；武藤葉子；尾川瑞季；永井利三郎；牛尾禮子 2007 保育所における気になる子どもの特徴と保育上の問題点に関する調査研究 小児保健研究 66 pp815～820
- [8] 厚生労働省 2006 厚生労働科学研究「軽度発達障害児の発見と対応システムおよびそのマニュアル開発に関する研究」
- [9] 松井剛太 2007 軽度発達障害のある幼児の行動変容に関する実践的研究—幼児の行動に対する保育者の理解と支援の観点から— 発達研究 21 pp185～192
- [10] 日高希美；橋本創一；秋山千枝子 2008 保育所・幼稚園における「気になる子どものチェックリスト」の開発と適用 東京学芸大学紀要総合教育学系 59 pp503～512
- [11] 郷間英世；圓尾奈津美；宮地知美；池田友美；郷間安美子 2008 幼稚園・保育園における「気になる子」に対する保育上の困難さについての調査研究 京都教育大学紀要 113 pp81

～ 89

- [12] 藤井千愛；小林真；張間誠紗 2010 保育園における“気になる子ども〔特別なニーズを有する子ども〕”への特別支援保育 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究 5 pp131～139